

国際学のシラバス化による上級日本語教育の試み

An Approach to Japanese Language Education for Advanced Learners

based on the Syllabus of International Studies

松下達彦

MATSUSHITA Tatsuhiko

桜美林大学：〒194-02 東京都町田市常盤町3758

Obirin University:tatsu@obirin.ac.jp

Abstract: Giving instruction based on the syllabus of International Studies is an effective way to teach Japanese to foreign students majoring in liberal arts; especially to promote their motivations to study vocabulary and academic skills. In this way they can study the relations between their own countries and Japan of various issues and problems. Based on this idea, we have edited a new Japanese textbook consisting of 9 chapters. Within these chapters are 23 units, which cover a diversity of topics, including Intercultural Communication, International Politics and International Law, Ethnicity and Nationalism, World Economy, Information Technology and Society, Ecology and Life, Japanology, Family and Lifestyle, and other subjects of contemporary concern. Each unit consists of reading materials, notes, and various kinds of tasks and a vocabulary list. We also provide instruction in the retrieval, drafting, and presentation of reports, using newspaper articles and TV programs with the textbook.

キーワード：上級日本語教育、国際学、シラバス、教材、日本事情、アカデミックスキル、思考法

1. 上級日本語教育における国際学のシラバス化の意義

初級・中級の日本語教育では文型・機能・場面等に基づいた体系的シラバス構成がすでに数多く提案されているが、上級においては体系を意識したシラバスは極めて少ない。学習者のニーズを一般化するのがむずかしいことも一因であろう。

筆者の勤務校(桜美林大学)では、大学・大学院等で種々の専攻へ進む文科系学生のニーズを一般化し、体系化するために3年前より「国際学」の概念を導入してシラバス化と教材作成を試みた。国際学シラバス化の利点として右の3点があげられる(松下(1994))。

* 留学生は母国・母文化と日本との関係で研究テーマを設定することが多いので、専門課程で必要な知識、語彙等を効果的に修得できる(図1・表1=松下(1994)より)。

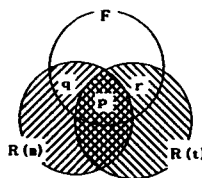
* 教材に関わる各種の発展的タスクを行うことにより、学習者は国際間の関係や比較といった国際学の基本的観点を意識できるようになる。

* 留学生自身が分析の材料をもち、かつ、動機も高いトピックで授業を行うことで、授業が活性化される。

表1 研究テーマp(図1)に関する知識の分析表

テーマ：「日中貿易の現状と将来」		
専攻分野 における	日本に関する知識	日本の国際貿易・日中貿易に関する知識
	出身地域に関する知識	中国の国際貿易・日中貿易に関する知識
	一般的知識	国際貿易に関する一般的知識

図1 留学生に特徴的な研究テーマ(p)



F：専攻分野に関する一般的知識と興味

R(m)：学習者の出身地域mに関する知識と興味

R(t)：留学先tに関する知識と興味

$R(m) \cap R(t)$ (網の部分)：留学生の特長の発揮される分野。

例えば、学習者の出身地を中国、専攻を経済学と仮定すると、研究テーマp、q、rにはそれぞれ以下の例が考えられる。

p：日中貿易の現状と将来

q：中国経済特区における税制度とその効果

r：戦後日本の関税制度の変遷

また、任意の二つ(またはそれ以上)の地域x, y(z, ...)を想定すれば $R(x) \cap R(y)$ は国際学の概念にほぼ相当するであろう。

2. 国際学とは何か

国際学は一般的には国際関係学・比較文化学・地域研究によって構成されると考えられる。そこで「国際」「比較」の2語をキーワードとし、これらの合成語の語基としての意味を分析した上で、これらを語基として構成される学術用語を『日本十進分類法』(NDC)等の図書分類から検索し、NDC順の「国際学キーワードリスト」を作成した(松下(1994)に掲載)。このリストは図書の検索や新聞・雑誌記事のCD-ROM検索に有用である。

3. 国際学シラバス化教材『日本語上級読解演習

国際学アラカルト』(仮称)による授業

上述の考察に基づいて、桜美林大学の日本語I・II(学部1年生対象、週4コマ)で使用するた

めの読解演習用教材として新屋・松下(1994)を作成、改訂し、『日本語上級読解演習 国際学アラカルト』(仮称、未公開)とした。これは23編の文章を「国際関係と民族・国家」「コミュニケーションと文化」「日本論」「家族・ライフスタイル」「情報と社会」「世界経済と貿易」「国際政治と国際法」「地域格差と人口移動」「環境と生命」の9章(+別章「古典」)に編成したものである。各章は2ないし3の読解ユニットにより構成した。

読解の素材の選択にあたり重視したのは問題提起的であること、長すぎないこと、時事的すぎないこと、グローバルな視点をもっていることなどであるが、「私たち」という語が日本人を指すなど、日本人の視点に立つ文章が多く、苦勞した。

表2 各章の素材の構成の例(第5章)

第5章 情報と社会

キーワード:	テクノロジー、管理、メディア、衛星放送、情報格差
ユニット1:	佐藤健二「テクノロジーの両義性」
ユニット2:	加藤秀俊「メディア技術と放送文明」
	+NHK教育「ビデオカメラがあなたを見ている」
	+朝日新聞'95.1.4.夕「放送の国境消えるアジア」
	+その他新聞記事等(収集したものから適宜採用)

各ユニットは [読む前に] [読解本文] [注] [内容理解] [調べてみよう] [発展] および [語句リスト] [語句の用法] からなり、各章末には [参考文献] を付した。[語句リスト] に語句のグルーピングを施したことも工夫した点である。各ユニットのほかに授業では関連の新聞記事やテレビ番組を速読や聴解の教材として併用した。また、プロダクティブな活動として資料検索、レポーター発表、レポート作成は1年間の後半(日本語Ⅱ)に必ず行ない、テーマは読解の内容に関連する範囲の自由選択としている。

桜美林大学の授業は名古屋大学日本語・日本文化研修コースの「総合演習」(藤原・初山編(1997)参照)と理念的には重なる部分が多いが、名古屋大学のコースが予備教育に集中する900時間のコースであるのに対し、桜美林大学では学部の他科目と並行して行われ、年間で150時間程度しかないため、各章の扱いには濃淡をつけ、[発展]は各ユニットですべて扱うのではなく、発表やレポートの材料として使用している。

国際学シラバス化の効果を他の方法と比較して定量的に評価することはむずかしいが、3・4年生へのヒアリング結果を総合すると、語彙面、知

識面では比較的よい評価を得ている。中には日本語の授業で扱ったテーマを卒論に発展させた学生もいる。今後の課題は学生により異なる興味や限られた時間の中で、学生の発話意欲を活かしたディスカッションやプロジェクトワークをどう組み立てるか、また思考の枠組みを意識したタスクをどう盛り込んでいくかなどである。なお、[語句リスト] [語句の用法]を除く部分は日本人学生1年生対象の「基礎演習Ⅰ」でも3回使用し、高い評価を得ている。

4. これからの上級日本語教育のコンセプト

今後の大学等における上級日本語教育について、現状をふまえて、以下の3点を主張する。

*ゼミ発表やレポート・論文の作成に必要なアカデミックスキルの習得について、一層の研究が必要である。その中には課題の設定の方法など、思考法も含まれる。その思考の枠組みとして文科系上級の場合、国際学が有効である。

*日本を個別の対象として紹介する情緒的な言語素材ではなく、異文化理解教育および学問的思考の促進の観点から、日本を他国・他地域との関係・比較で客観的にとらえた言語素材を教材化すべきである。(秋山(1997)の「日本社会の諸相」を「グローバルな視点から点検する」という理念に近いが、例えばカルチャーショックや民族アイデンティティーの問題など、より留学生個人に視座をおいた素材も含んでよい。)

*生活適応レベルの日本事情教育を一通り終えた後の日本事情教育は、(政治、経済、文学等の専門課程にすすむ学生が対象の場合、)日本の高等文化の紹介等に進むのではなく、専門科目での授業における、日本人学生とのレディネスの相違の解消を第一の目標にすべきである。

【引用文献】

- 松下達彦(1994)「国際学とは何か -上級日本語教育の構想-」、桜美林大学『国際学レビュー』第6号
- 新屋映子・松下達彦編(1994)『国際学のための日本語上級教科書』(非売品、日本私学振興財団の補助により作成)
- 藤原雅意・初山洋介編(1997)『上級日本語教育の方法』凡人社
- 秋山 豊(1997)「日本事情教育：理念と実践」、藤原・初山編所収